



陳言コラム-33

中国雑談

「無から有を生ずる」浙江商人

ここ数年、筆者は浙江省に行く機会が増えています。ここは中国有数の臨海省で、舟山漁場などの大漁場に恵まれています。地理的にみると、東北地区に比べて、資源は格段に少なく、逆に人口は多く、暮らしやすい土地とは言えません。さらに、上海や北京に比べると、科学研究や人材の面でも差を付けられています。しかし、近代中国の歴史をひも解くと、浙江の人々は機を見るに敏で、ちょっとしたチャンスを見逃さず、トップランナーの栄光を手にしてきました。「無から有を生ずる」のが浙江商人の特長なのかも知れません。

さて、浙江には数多くの特産品がありますが、その土地とミスマッチではないかと思わせるものがたくさんあります。いくつか例を挙げましょう。桐郷は全国有数のウールジャージーマーケットがありますが、羊毛は生産していません。最大のプラスチック市場で有名な余姚はプラスチックを生産していません。皮革を生産していない海寧に皮革市場があり、森林がない嘉善に国内最大の木工市場があるのです。

こうしたミスマッチの典型は義烏でしょう。国連と世界銀行がここを世界最大の日用雑貨の集散地、交易センターとして選定したことは決して間違いではないことが良く分かります。ここで日用雑貨をどれだけ生産できるかとか、どれだけ安くできるかとかは、「無から有を生ずる」浙江という土地柄からすれば、「言わずもがな」のことなのでしょう。

全国最大の日用雑貨生産能力があっても、売れなければ商売になりません。ここで「浙商（浙江商人）」という言葉がここ数年脚光を浴びています。

昔から中国では地方商業を語る際に「五大商幫」と言って来ました。粵（広東）商、徽（安徽）商、晋（山西）商、浙（浙江省）商、蘇（江蘇）商の五つです。この中で浙商は19世紀からいち早く上海開発に参画し、「十里洋場」と言われた租界・上海でその盛名を轟かせ、上海の大半の産業を独占したこともある伝説的な集団でした。浙商は「華夏（中国の古称）第一商幫」と称されました。これは表向きの言い方で、他の商人集団は「東洋のユダヤ人」と陰口をたたいていました。このあだ名は浙商の特徴をうまく言い当てています。

この集団の頂点だった「浙江財閥」は広辞苑も取り上げ、「上海を中心とする浙江・江蘇省



出身の実業家の集団。初め買弁資本として発生し金融資本に発展。蒋介石の国民党政権の経済的基礎をなした」と説明しています。

当時の浙商の代表的な人物で日本でもかなり知られていたのは「アジアの海運王」と言われた包玉剛（パオ・ユーコン）でしょう。虞洽卿は上海で名声が大きく中国人なら誰でも知っていました。明治初年に函館に来航し、後にフカひれ大王と言われた張尊三、明治時代に日本に帰化し、神戸でマッチなど扱い、関西財閥の重鎮だった呉錦堂は歴史に詳しい人であれば御存じでしょう。浙商は日本との縁が相当深かったのです。

現代で言えば、アリババの馬雲（ジャック・マー）、レノボの楊元慶（ヤンユアンチン）、ネットイース（網易）の丁磊、盛大ネットワークの陳天橋、BYDの李書福、万向集団の魯冠球、分衆伝媒の江南春などで、彼らと同じくらい多くの人に知られていました。

戦後の浙商は改革開放前にはかなり抑圧されましたが、改革開放後は急速に回復し、一方かつて全国に名声を誇った安徽商人、山西商人はほとんど影響力を失い、広東商人、江蘇商人は広東、江蘇の経済規模で言えば浙江省を上回るでしょうが、同じようには復興していません。現在、かつての5大商帮の中で浙江商人だけが比較的活躍しているのです。

さて浙商と言われるのはどのような人たちでしょうか？ 5500万の人口のうち、恐らく800万人が浙江を出て、中国各地で商売をしていると思われます。さらに行った先で地域別の団体行動を取っています。主なものに寧波商帮、温州商帮、紹興商帮があります。この外にあまり知られていませんが、湖州商帮、蕭紹商帮、台州商帮、義烏商帮などがあり、彼らをひっくるめて漠然と浙江商人と呼んでいます。

彼らが時代の何を先取りし、何をしていたか、と言いますと、戦前の浙商の主要なビジネスは銀行、海運、紡織などでした。戦後30年余は沈黙を余儀なくされましたが、彼らはITが全く新しい分野だと目を付けると、ITに対する法整備が進んでおらず規制が非常に少ない時期に、ここから再出発を期し、直ちに過去の銀行（電子支払い）、物流の結合を始めました。

浙商が「無から有を生じる」という評価は必ずしも正確とは言えませんが、彼らが現代中国でビジネスチャンスを見極めにとらえ、そのチャンスを迅速に拡大しているチャレンジャーであることは間違いありません。